日本考古学の視点から

神仙思想の伝来と倭化

辰巳　和弘

1．弥生時代における仙薬の服用

奈良盆地のほぼ中央にある唐古・鍵遺跡（奈良県田原本町）は、約30万㎡に及ぶ弥生時代の大環濠集落遺跡として知られる。その第80次調査は、2000年秋に遺跡の中心に近い唐古池の西で実施され、調査区の中ほどを東北から南西方向に伸びる弥生中期後半の溝ＳＤ101Ｂを検出、その最上層から前例のない遺物が出土した。

長軸約16㎝（復元）、短軸約13㎝、厚さ約7㎝の大きさを測るそれは、ちょうど皮の厚いカレーパンから餡を抜きだし、なかを空洞にしたような形態を想像していただけたらよかろう。その殻状の物体は、長い時間の経過とともに砂礫土層中の鉄分が小さな粘土塊を核に、砂礫を巻き込みながら粘土塊の周囲に褐鉄鉱の層を形成してできた、自然の生成になるものである。その重量は826ｇと、ずっしり重い。今回の資料は、殻の一部を打ち欠いて、核であった粘土を取り出した後の空洞にふたつの硬玉（ヒスイ）製大型勾玉を入れたものである（**写真１**）。

写真１　勾玉を納めた褐鉄鉱の殻（唐古・鍵遺跡）

一般にこのような褐鉄鉱の塊は地中から掘り出されると核となった粘土が乾燥して、殻をなす褐鉄鉱との間にわずかな透き間ができ、それを振ると音をたてることがあったり、染み込んだ水に粘土が溶けだして黄褐色の泥状を呈したりすることから、「鈴石」・「鳴石」・「水石」またはその形状から「饅頭石」とか、「壺石」と呼ばれ、奇石愛好者の間ではよく知られる。当該の資料は、砂礫の組成から奈良市の春日野付近からの産出品と推定されている。

殻状をなす当該物体の外観はお握りのように固まった砂礫のかたまりにすぎず、決して人々の目にとまるような格別の色や形をしているわけではない。それにもかかわらず、生成の核となった粘土を

抜いた後の空洞に、入手が難しい新潟県西部で産出するヒスイで製作された大きな勾玉が入れられていたのである。大きい勾玉は乳白色のなかにヒスイ特有の明るい緑色が混じり、4.6㎝、重さ48ｇで、これまで出土した弥生時代の勾玉のなかでは10番目ぐらいの大きさである。もうひとつの勾玉は3.6㎝、重さ16.4ｇと少し小さいものの、鮮やかなヒスイ色を呈する優品であった。

古代中国にあって、この褐鉄鉱の殻状物体の核となった粘土塊は、「太乙禹餘粮」とか「禹餘粮」と呼ばれる仙薬として珍重された。神仙の道や仙薬の処方、また不老不死の法を説く書として知られる『抱朴子』内篇（東晋の人、葛洪の著）には、仙薬のなかでも丹砂・黄金・白銀・諸芝・五玉・雲母・明珠などと並ぶ上薬として「太乙禹餘糧」の名がみえ、それを服用すれば空を飛び、寿命を延ばすことができるとある。仙人になれるというのだ。『抱朴子』は続けて、褐鉄鉱の殻のなかで泥状となった粘土も「石中黄子」の名称で上薬にあげている。また『神農本草経』の上品にも「太一餘糧」や「禹餘糧」が収載される。

注目されるのは、正倉院御物のなかに、「大一禹餘糧」の名称で、褐鉄鉱の殻状物体の残片（一辺33㎜、厚さ13～14㎜）が収蔵されるとともに、それに内蔵されていたであろう紫色の粘土粉末約130ｇが存在する事実で、くわえてその薬名が正倉院北倉に収蔵される薬の献納目録にみえる点も無視できない。『種々薬帳』と称されるその献納目録は、光明皇后が毘盧舎那仏に献納した、天平勝宝八年（756）六月二十一日付けの薬物リストで、60種の薬名中に「大一禹餘糧二斤十二両　並袋」や「禹餘糧一斤九両二分　並袋」の薬名がみえる。鉄分の含有が多く赤色や紫色を呈するものが上質とされ、それが前者にあたり、その他の色が後者に該当するとされる。現存するさきの薬物が『種々薬帳』の記載品に該当するか否かは不明というほかないが、その薬効が8世紀にも認められていたことは確かである。

表面が粗雑な砂礫のかたまりにしか見えない褐鉄鉱の殻状の物体に貴重なヒスイ製勾玉を納めたのは、それが仙薬を内蔵する奇石であることが知られていたからに違いなく、その内容物が仙薬として用いられた可能性は高い。弥生中期の唐古・鍵遺跡に住んだ人々が、すでに中国の薬学やその背景にある神仙思想を理解していたことを物語る貴重な資料である。

かねて筆者は、銅鐸絵画にみえる「工」字形の道具を所持する人物が、崑崙山に棲む女仙、西王母の姿をデフォルメした図像であることを、中国の画像磚との比較検討から述べ、既に弥生中期に神仙思想が伝播していたことを論じたことがある（『「黄泉の国」の考古学』講談社現代新書 1996）。唐古・鍵遺跡出土の褐鉄鉱の殻状資料はそれを裏付ける。

かように考えると、内に包含された粘土を採り出した後（もちろんそれが「禹餘粮」と呼称されたか否かは不明であるものの、仙薬として服用されたことは確かであろう）の空洞に、希少なヒスイ製勾玉を納めるという行為にも意味がみいだされるべきである。

ヒスイの産地である新潟県の姫川は古代の越後国頸城郡沼川郷を流下し、沼名河と呼ばれた。奈良時代、姫川流域で採れる玉は『万葉集』に歌われた。

「沼名河の　底なる玉　求めて　得てし玉かも　拾ひて　得まし玉かも　あたらしき　君が　老ゆらく惜しも」（『万葉集』巻第13－3247）

「ようやく求めて入手することができた沼名河の底にある玉よ。その玉のごとく惜しまれる貴方が老いてゆくのが惜しいことだ」という歌意。そこには永遠の光を放つ沼名河の玉にくらべた、人のうえを流れ往く時の無情が嘆かれる。万葉人の神仙界（常世）への強い憧れがうかがわれる。

後漢の方格規矩四神鏡には次のような銘文がある。

「駕蜚龍　乗浮雲　上大山　見神人　食玉英　餌黄金　宜官禄　錦子孫　楽未央　大富貴」（龍車

を御して浮雲に乗り、太山に登って神人とまみえ、すばらしい玉を食べ黄金を摂る、官位の昇進は思いのまま、子孫は繁栄し、楽しみは尽きることなく、大いに富貴を極める）

そこには鏡を所持することの効能が歌われ、仙薬としての玉や黄金がみえる。さらに『抱朴子』もまた「玄真（玉の別名）を服する者は、其命極らず」と説く。

弥生人はヒスイ製の勾玉に、不老不死の呪力を見いだそうとしたらしい。不老長生の仙薬の母胎であったくだんの褐鉄鉱の殻には、ふたたび不老長生の呪具としてのヒスイ製勾玉が納められたのである。ゴツゴツした砂礫の塊にしか見えない外観を見せる当該資料は、おそらく巾着のような袋物に入れられ、不老不死のお守りとして、換言すれば不老不死をもたらすマナが籠もる「玉手箱」として、紀元前後の唐古・鍵遺跡集落の首長に所持されたであろう。

他方、池上曽根遺跡（大阪）の集落中心で発掘された、正面に祭儀用井戸を配置した大型掘立柱建物跡では、独立棟持柱の一方を立てるにあたり、柱の裏込めを版築状に突き固める過程でヒスイ製勾玉が埋め込まれていたという事実にも留意する必要がある。くだんの資料と同じ弥生中期後半に属するその発掘事例は、ヒスイ製勾玉が建物自体の永遠を祈念するに加えて、そこでの祭儀を実修する首長とその支配の永続を願う、まさに魂振りの呪物であったことを示している。

2．魂の在りか

勾玉が具有する象徴的な意味をよく示す考古資料を渉猟してみよう。

多数の勾玉文を外区に巡らせた古墳時代倭鏡の優品がある（図１―①）。前期中葉の紫金山古墳（大阪）から出土した直径 35.9cmの大型品で、勾玉文帯神獣鏡と呼称される。内区には王父母二神とその侍者の神像や四神などの神獣を配し、地文には細線渦巻き文を施す。西王母像には玉勝の頭飾りが大きく表現される。一方の外区には 35 個の勾玉文が頭を鈕側に向けて並び配される。倭人が古墳に好んで副葬する大型銅鏡が、「明鏡の九寸以上なるを用ひて自ら照らし、思存する所有ること七日七夕なれば、則ち神仙を見る」（『抱朴子』第十五雑応）とする神仙への道を具現したところに誕生した昇仙の葬具であることはいうまでもない。内区を守護する意味を備えた鋸歯文帯や櫛歯文帯、また波状文帯で飾られることが通有の外区に、ひときわ幅広の区画帯を設けて、勾玉という中国にはない装身具をモチーフとした独創的な圏帯デザインを用いたところに、単なる装飾性を超えた鏡工人の明確な思惟をみてとるべきである。それはひとつの鏡面を構成する図文として、主文たる内区が表現する神仙界と密接不離の関係にあると理解すべきであり、勾玉が具えた魂振りの呪的属性を踏まえれば、勾玉文帯を神仙界への転生を促すための図文とみなすことができる。

さらに京都府南部、木津川右岸の緩傾斜地に築かれた中期の大型古墳、久津川車塚古墳（全長約 180 ｍの壺形古墳）における竜山石製長持形石棺内からの遺物の出土状況は、勾玉に付託された古墳時代人の深い思いをよく語る（図１―⑤）。1894 年と 1915 年の 2 度の調査によって明らかとなった棺内の状況は以下のとおり。遺体は棺底一面に敷きつめられた白色河原石の床上になお遺存し、その頭蓋の上部に画文帯環状乳神獣鏡、胸上にひときわ大きな三角縁神獣鏡（径 22.2cm）、腹部に画文帯同向式神獣鏡、上半身の両側と頭の左右にそれぞれ一枚ずつの四獣鏡を、いずれも鏡背を上にして置き、棺の四壁直下に並べられた 7 口の刀剣とともに、さながら被葬者を護るかのようであった。遺骸は碧玉製管玉とガラス製小玉を連ねた頸飾りを着けて葬られていた。

『抱朴子』は言う。

「明鏡は或は一つを用ひ、或は二つを用ふ。之を日月鏡と謂ふ。或は四つを用ひて、之を四規と謂

ふ。四規なれば、之を照らす時、前後左右に、各一を施すなり。四規を用ふるときは、見れ来る所の神甚だ多し。（中略）老君を見れば則ち年命延長して、心は日月の如く、事として知られざること無きなり」（巻十五雑応、石原快隆訳『抱朴子』岩波文庫より）

「万物の老いたる者は、其精悉く能く人の形に仮託し、以て人の目を眩惑して、常に人を試むるも、唯、鏡中に於ては其真形を易ふる能はざるのみ。是を以て古の入山の道士は、皆明鏡の径九寸已上なるものを以て、背後に懸く。則ち老魅も敢て人に近づかざるなり。」（巻十七登渉）

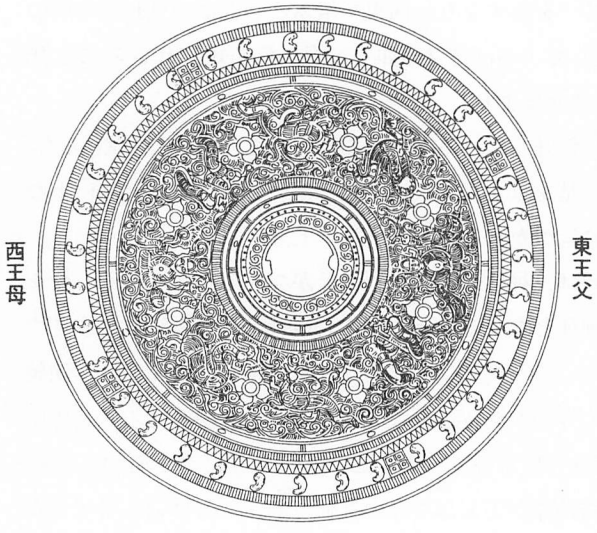
前者は、優れた鏡を用いて前後左右から照らせば、神仙にまみえることができるだけでなく、命を延ばし、将来を予知する力を獲得でき、自らが神仙となれることを、また後者は、その鏡にさまざまな魑魅魍魎の正体を明かす辟邪の呪力が備わっていると説く。上述した久津川車塚古墳における銅鏡の副葬状況は、それがもつ呪力によって、死者の昇仙が期待されていたことをうかがわせる。兵庫県御津町の権現山51号墳にあって、木棺内の木製枕に眠る被葬者の頭部を囲むように、5面の三角縁神獣鏡（いずれも径9寸の鏡、そこに鋳出された神像が王父母などの神仙であることはいうまでもない）が鏡面を内側にして立てかけられていた事例は、そのもっとも端的な副葬のありようといえる。黒塚古墳（奈良）や一貴山銚子塚古墳（福岡）などにみる多数の銅鏡の副葬状況もまたしかり。

久津川車塚古墳においてさらに注目したいのは、棺底内の全面から多数の滑石製の勾玉と刀子が混じり合った状況で検出された点で、前者は5000点を超える他に例をみない量の多さで（刀子形模造品は40余点に過ぎない）、あたかも滑石製勾玉をもって被葬者をくるんだかのような状況が想像される。しかも棺に蓋を架ける前にかなりの量の水銀朱を流し込んだようで、報告書に拠れば、「遺骸遺物は何れも（中略）多量の朱に混じて存在せる」状態であったという。なお、『抱朴子』が上薬の筆頭に「辰砂」を載せることからみて、古墳時代の倭人が水銀朱に仙薬としての著しい効能をみていたことは確かであるる。

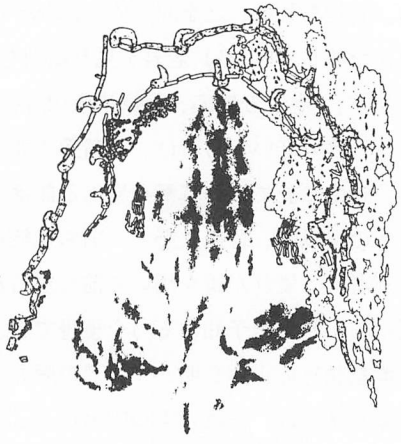
久津川車塚古墳における銅鏡の副葬状況に神仙思想が垣間見えるなら、被葬者の身を包むように副葬されていた異常な数の滑石製勾玉についても、同じ視点から検討する余地がある。『抱朴子』内篇に、1斗を服用すれば千年の寿命を得ることができる石脳芝は、滑石の大塊中から稀に得ることのできる秘薬とみえ、さらに同書が引用する「黄帝九鼎神丹経」にも、神丹の調合に使用する薬のひとつに滑石がみえる。また『神農本草経』においても滑石は上品に記載される。その滑石で作られて、棺内の遺体をくるむ多量の勾玉。それには装身具を超えた属性が付与されていることが確信される。

弥生後期末の赤坂今井墳丘墓（京都）第4主体部では、3連の玉飾りを被葬者の頭部外周に巡らせていた（図1—②）。外側と内側はガラス製の勾玉と管玉、中央はガラス製勾玉と碧玉製管玉を組み合わせて連ねた頭飾りであった。ガラス製の玉は、勾玉が緑色、管玉がスカイブルーを呈していた。さらに当該被葬者の耳の位置からは、細い碧玉製管玉を4～5段で6列の簾状に組み、その下端に数個のガラス製勾玉を取り付けた垂飾が検出された。これら玉飾りはその連なりが極めて良好で、被葬者の頭に飾り付けたというよりも、木棺に死者を納めた後、頭部外周や耳の位置に置いたことをうかがわせる検出状況であった。当該の被葬者には、装身具の装着はほかになく、前述した権現山51号墳での大型銅鏡の出土状況とあわせ、古代人は体のなかでも頭に魂が宿ると見ていたようだ。赤坂今井墳丘墓における被葬者の頭部を巡る玉飾りは、神仙世界を勾玉文で囲繞した勾玉文鏡の造形思惟に繋がりをもつことが理解される。

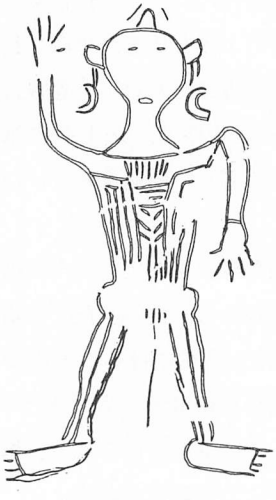
なお赤坂今井第4主体部にあって、遺骸は腐朽してほとんど失われていたが、木棺の底に幅60cm・長さ2mの範囲に水銀朱が厚く遺存しており、玉飾りの上に被せられた面布と推定される革状有機質の上面にも水銀朱が堆積していた点からみて、棺蓋を被せる段階で、遺体に多量の水銀朱がかけられ



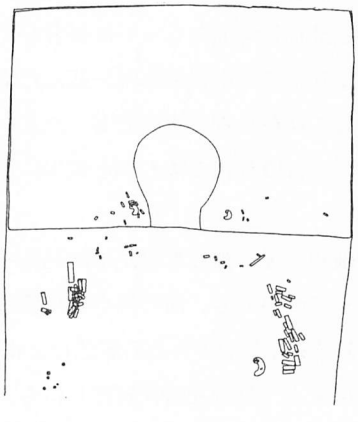
① 紫金山古墳勾玉文鏡



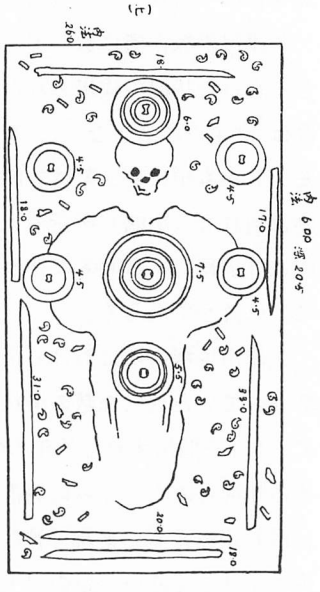
② 赤坂今井墳丘墓第４主体
頭飾りと耳飾り



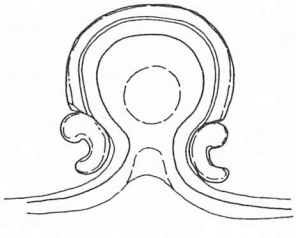
③ 黄金塚２号墳
人　物　画



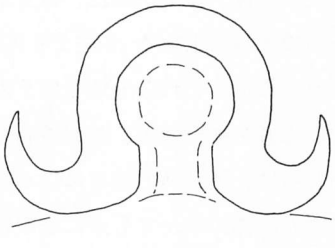
④ 向野田古墳
玉類出土状況



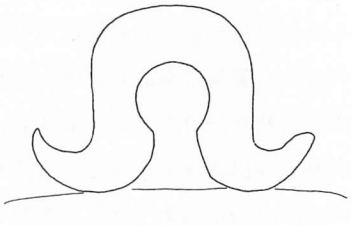
⑤ 久津川車塚古墳
石棺内副葬品の状況



⑥ 磨臼山古墳
造付け石枕



⑦ 燈籠山古墳
埴製枕頭受部輪郭



⑧ 快天山古墳
造付け石枕（１号）

図１　葬送にかかわる勾玉形装飾（縮尺不同）

たようだ。

3．勾玉の呪力

京都盆地の東、伏見丘陵の南端に築造された黄金塚2号墳は、紫金山古墳よりやや後出する壺形墳である。その墳丘を結界する円筒埴輪列には等間隔に大きな盾形埴輪が立てられていて、そのひとつに人物画が線刻されていた（図1—③）。高さ19cmの大きさに描かれたその人物画が表現する、両脚を大きく開き、男性器を露呈させて立ち、右腕を振り挙げ、左肘をはりながら腕を引き降ろそうとする姿はダイナミックで力感溢れ、描き手の腕の確かさを伝えている。アメノウズメ神話にみるように、性器露呈の所作は豊饒や邪霊退散を期待して実修される呪的行為にほかならない。しっかと立つ太い両足は、五指までも表現した裸足で、たなごころを大きく開いて腕を振る上肢と連動して、彼がさらなる呪性増幅を願って大地を踏む、反閇という魂振りの呪儀をする人物とみることができる。

黄金塚2号墳の人物画にあって、大きく斜め上方向に突き出し、いかにも異形性を強調する耳の形状も、邪霊接近の予兆をいち早く聴きとることを期待したが故と理解され、後に出現する盾持人埴輪の頭部表現に繋がる。並外れた聴力を付与された異形の耳にはC字形の耳飾りが垂下される。古墳時代において、かかる形状の耳飾りは勾玉をおいて他になく、葬送の場において反閇の呪作を行う人物が垂下した、まさに魂振りの呪物と理解される。

古墳時代、勾玉は頸飾りとして繁用されることはよく知られた事実である。しかし意外なことに、黄金塚2号墳の盾形埴輪に刻まれた人物画のほかに、それを耳飾りに用いたことをうかがわせる事例は極めて少ないのである。

古墳の発掘例を検討すると、中葉の築造とみられる向野田古墳（熊本）の刳抜式石棺における玉類の出土状況が注目され(図1—④)。石棺内には、その北小口に接してはめ込まれた高さ12cm前後の石枕に頭を置く中年女性の全骨格が見いだされ、その頭部両側、耳の下端に近い対称の位置にヒスイ製勾玉がひとつずつ、そして勾玉の周辺から下顎骨のまわりにかけて33個の碧玉製管玉が散らばった状況で検出された。石枕の上には、2面の銅鏡が、いずれも鏡面を下に副葬されていた。報告者は勾玉が管玉とともに一連の頸飾りを構成するとみるが、その連ね方では体の正面の位置に頸飾りのポイントとなる親玉が存在せず、頸の両側、ちょうど肩の背にかかるあたりに勾玉が位置することになり、立位の人物がこれを頸に掛けた場合に、勾玉はほとんど目につくことがなくなる。それでは勾玉を玉に貫く意味が見いだせない。人物埴輪にみる頸飾り表現にも、そのような勾玉の用例はみられず、それはやや間の抜けた貫き方といえる。むしろ頸飾りは管玉のみで構成され、勾玉は耳飾りとして垂下されたとみるのが出土状況の無理のない理解であろう。過去の発掘事例にみる玉類の検出状況を再検討する必要がある。

また人物埴輪では、わずかに神保下條2号墳（群馬、6世紀後半）の坏を捧げる女子半身像に勾玉を耳飾りとした例を渉猟できたにすぎない。それは円環状に粘土を貼り付けて表現された耳の下端に、勾玉の頭と尾を両側に張り出すかたちに装着されたもので、黄金塚2号墳の人物画での勾玉の表現と同じである。なお、人物埴輪に認められる耳飾りはほぼすべてが耳環であって、それに幾つかの粘土粒を連ねて耳玉を表現したり、稀になんらかの垂飾を表現した例がある。

向野田古墳での、被葬者が眠る石枕とその耳を飾ったとみられる勾玉の出土状況は、築造時期をほぼ同じくする磨臼山古墳（香川・遠藤塚古墳とも呼称）の刳抜式石棺に彫り出された造付け枕の形状（図1—⑥）を彷彿させる。全長187cm・幅36～40cmを測る棺底の、一方の小口側32cmばかりをやや

高く枕部として削り残したその中央に、外側を丸く盛り上がらせて、頭から頸を経て肩に流れる受部外縁を造り出し、さらにその外周に一段低く段を巡らせる。しかも頸受部の外側に接するように、頭受部の外周を巡る段が切れた部位から下に接して、長さ7.5cmの大きさで、頭と尾を外に向かうように勾玉形が削り出される。その位置から、耳に垂下された勾玉を表出したことは確かであり、受部の形状が示す頭の大きさに比べ、勾玉をひときわ大きく表現するところに、それがもつ高い象徴性が暗示される。さきの黄金塚2号墳の人物画での勾玉表現から説き明かした勾玉の属性とあわせ考えると、頭部をかざる勾玉には、魂の在所を護るとともに、それに生命力を付与する魂振りの意味が込められていたと思考される。

磨臼山古墳のほか、讃岐地方の前期古墳では、枕造付け刳抜式石棺を埋葬施設に採用する事例が散見される。なかには快天山古墳1、2号割竹形石棺のように、頭受部外縁を巡る幅広の突帯が頸受部外縁から両肩へと大きく鈎形をなして外反し、その先端を撥ねあげるように終(しま)う例がある(図1—⑧)。そして三谷石舟古墳から快天山3号石棺へと次第に外反の度合いを減じ、やがてはΩ形となるデフォルメの過程を追うことができる。この受部外縁突帯が両肩の位置で大きく鈎形に撥ねて終う形状は、磨臼山古墳の勾玉の尾の部分を誇張した表現と理解でき、勾玉の頭部は初期の段階で外縁にとりこまれてしまうという変遷を考えることができる。

しかも快天山1、2号石棺の造付け枕の受部外縁の形状が、柳本古墳群中の燈籠山古墳（奈良）から出土した埴製枕（藤田美術館蔵）と極似する事実（図1—⑦）は、両者の基層にある造形思惟が共通することを語っている。「死者の枕」は石棺内に造付けられたり、向野田古墳例のような単体で別造りとされた石枕だけではない。埴製・陶製の枕、器台や壺・高坏などの土器の一部を打欠いたり組み合わせた土器枕、粘土を枕形に固めただけの粘土枕、自然石を組合わせて枕とする例、横穴や横穴式石室の石屋形内に設けられた屍床に枕を彫り込む例、また終末期の阿武山古墳（大阪）出土のガラス玉を銀線で貫き結んだ玉枕の例。さらに特殊器台形埴輪や特殊壺形埴輪を伴う前期前半段階に築造された権現山51号墳で、はじめてその存在が明らかとなった木製枕（杉材製）も注目される。その被葬者の頭部に5面の三角縁神獣鏡が立て巡らされていたことの思想的背景については先に述べた。古墳時代をとおして、各地でさまざまな素材を用いた「死者の枕」（葬枕）が確認される。

勾玉を表出した磨臼山古墳の石枕の事例は、5世紀の茨城・千葉地域に集中的な分布をみる、立花を石枕の外周に立て巡らせた「常総型石枕」の存在を顕在させる。それは主に滑石で作られ、割竹形や舟形をした刳抜式木棺に眠る死者の枕である。高く彫り出した頭から頸を受る部位の周りに2～3重の高い段を巡らせ、その段に穿った数個の小孔に、一本の軸の先にふたつの勾玉を背中合わせに連結させた、立花と呼ばれる石製装飾を挿入し、死者の頭部を勾玉で飾り、儀礼を荘厳するための葬具であった。

四国と関東という地理的に大きく隔たった両者の間に葬枕をめぐる系譜上の関連性は指摘できないものの、死者の頭を勾玉で囲繞するという点に、同じ造形思惟の存在が指摘される。

しかし既に70点を超える出土数をみる「常総型石枕」ではあるが、立花を挿入するための小穴が枕の周縁に開けられているにもかかわらず、そこに立てられた状態で立花が検出された事例は皆無である。沼沢豊氏はかような事実を踏まえ、立花は被葬者が木棺内に据えられた石枕に寝かされて古墳に埋葬されるまでのいわゆる殯の期間、死者の頭を囲んで立て巡らされ、殯の終了とともに石枕からはずされて、枕の周辺にバラまかれるという葬送儀礼の次第での使用法を復元的に解明した（「石神2号墳の諸問題」『東寺山石神遺跡』千葉県文化財センター 1977）。

かつて筆者は古墳を「此界に創出された他界」と定義した（『古墳の思想—象徴のアルケオロジー』

白水社、2002)。墳丘を巡る濠や円筒埴輪の列が両世界を結界する仕掛けであって、墳丘上に並べたてられる形象埴輪群は、他界に転生した被葬者が王として永遠の生を過ごす空間を創出したり、そこを守護する構造物である。したがって被葬者の墳丘への埋納は、死者の霊魂が他界へ転生したことを確認し、殯が終了した段階であり、そこにおいて立花は不要となり、石枕からはずされる。すなわち立花に付託された魂振りの願いが達せられたと了解されたが故と理解される。

古代人が勾玉に強い魂振りの霊力の発揮を期待したことは間違いない。さまざまな表現手段をもって造形された勾玉形の「かたち」、その基層にある造形思惟の密接な繋がりに古墳文化を理解するひとつの鍵がある。

4．酒船石遺跡と変若水

木津川の上流、上野盆地のさらに上手に比土と呼ばれる2km四方の小盆地がある。盆地を囲む丘陵の東麓にある城之越遺跡（三重）では直径5m前後の3つの井泉がそれぞれ10mほどの間隔をおいて並ぶように発掘された。4世紀後半～5世紀の遺構である。井泉はそれぞれ自然の湧水点を1mばかり掘り下げたもので、ふたつの井泉では、湧水に砂礫が巻き上げられるのを防ぐために丸い石が貼りつけられていた。井泉にあふれる水を流す幅5～8メートルの溝は、たがいに合流しつつ、最終的に幅10mの大溝となって盆地中央に流れ下る（図2）。

注目されるのは、各井泉の湧水を集めて大溝へ導く溝の両岸に、汀に多少の曲りをもたせて小石を貼りつけ、州浜を造形し、さらに2箇所の合流地点に大きめの立石を組み合わせて、下流側に岬のような飛び出しを表出し、さながら中世寺院の庭園を連想させる景観を現出させている点である。そこには新たな景色（世界）を創造しようとする意図がみてとれる。また下流寄りの合流点には立石群のなかを水際に下る石段が設けられていた。周辺の大溝からは、体部に小穴を穿った小型の壺が多数みつかった。その小穴には細い竹などで作った注ぎ口が差し込まれ、なかの液体を注ぎ出す仕掛けとなっていたことが、人物埴輪が捧げる同じ形状の土器から類推できる。また井泉群から約100m離れた山際の2地点から、約150m²前後という、古墳時代では屈指の床面積をもつ大型掘立柱建物が2棟ずつ検出され、この建物群が、くだんの水の祭儀場とあわせ、有力首長の居館を構成していたと思考される。

城之越遺跡でのかような考古学情報から、石段下で汲みあげられた湧水が小壺に入れられて首長に捧げられ、それを首長が飲むという祭儀の次第が復元できる。井泉に湧きあふれる水は、此界にもたらされた他界の生命力の漲りとみなされた。井泉とそこにあふれる水が永遠の世界を象徴するものとして神聖視されたことはヒコホホデミ（山幸）が訪れたワタツミ（海神）宮の門前の井泉にかかわる記紀神話や、「高知るや　天のみかげ　天知るや　日のみかげの　水こそは　常にあらめ」（『万葉集』巻第1—52）と歌われた藤原宮の御井（藤井）などに明らかである。首長権は聖なる水によって更新され、永遠に続くことが保証されると念じられた。尽きることない井泉の湧水とその流れは、不老不死や若返りがかなう変若水として、古代王権祭儀には不可欠の装置であった。わけても城之越遺跡の溝の合流点に作り出された、立石で構成する突出部は、神が顕現する「御埼」に観念されたと思考される。それは佐太大神が誕生した加賀神埼（『出雲国風土記』嶋根郡条）や、少彦名命が常世郷へと旅立った熊野御碕（神代紀）などの神話を想起させる。「御埼」と州浜や湧水の流れからなる城之越遺跡の祭儀場の景色は、神仙界の霊山や霊川を具現したものと理解され、そこを流れ下る湧水は永遠や不死を象徴し、浴飲する者はその呪力を付与されるとみなされたであろう。

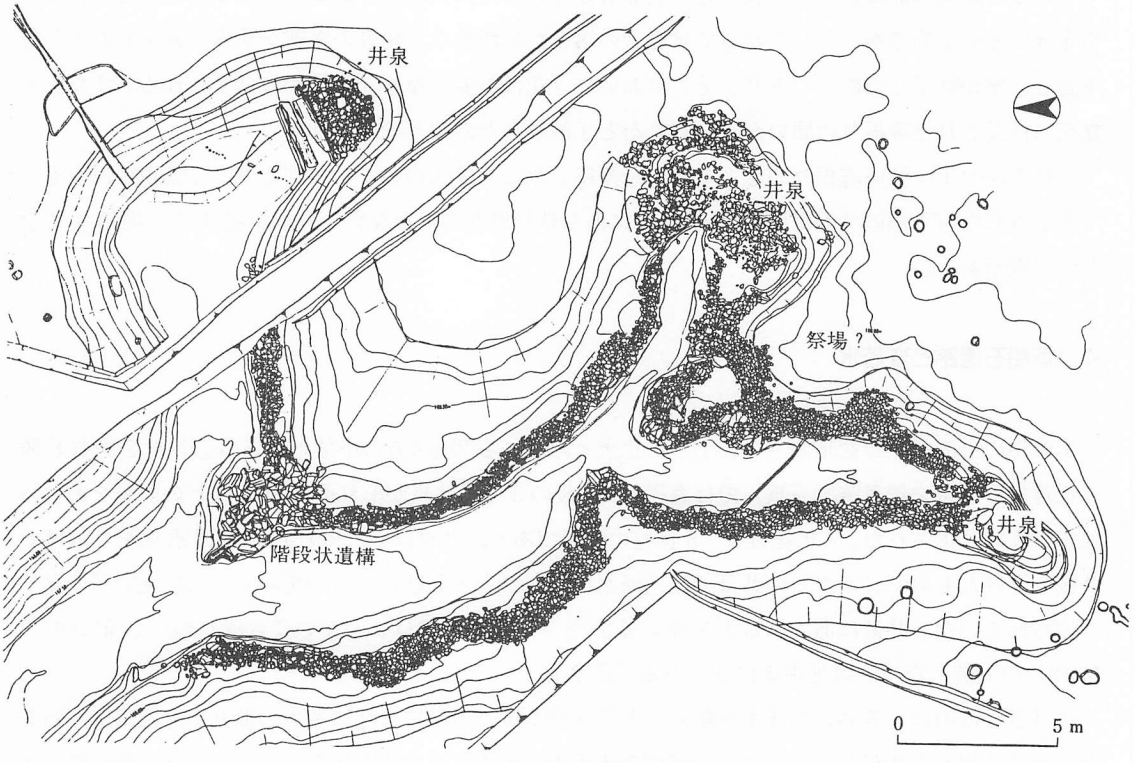


図２　城之越遺跡の水の祭儀場

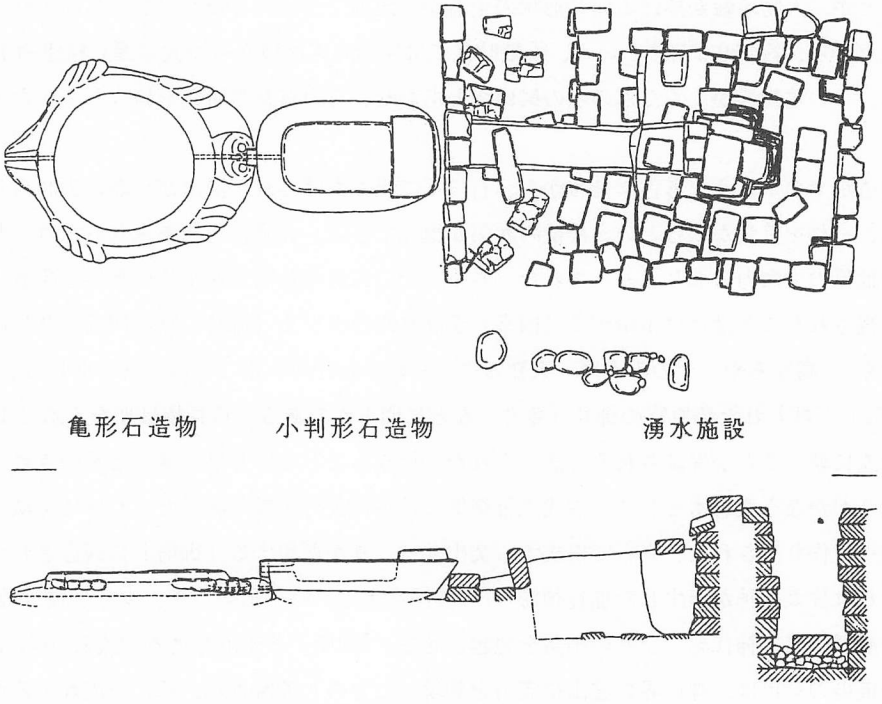


図３　酒船石遺跡の水の祭儀場

古墳時代の王権祭儀が、井泉の湧水やその流れを神聖視し、それを対象に祀りを実修した事例は城之越遺跡に限らない。それをやや溯る前期前半の中溝深町遺跡（群馬）や、5世紀前半の南郷大東遺跡（奈良）、さらには5世紀後半の三ツ寺Ⅰ遺跡（群馬）などの、首長居館やそれに隣接する水の祭儀場が各地で検出されている。また宝塚1号墳（三重）・心合寺山古墳（大阪）・狼塚古墳（大阪）など、水の祭儀場を形象した埴輪が古墳に配置される事例は、水と王権の密接な関連をよく主張する。

それは7世紀の王権祭儀にも引き継がれる。城之越遺跡で明らかになった、井泉とその湧水の流れから汲みあげた水を神聖視し、首長がそれを飲浴する行為は、6世紀の飛鳥、酒船石遺跡（奈良）での亀形石槽とその背に導かれる湧水源を中心とした、石敷遺構での大王による祭儀へと発展的に繋がる（図3）。その遺構は幾つもの小さな槽をひとつの巨石に彫り連ねた、酒船石と呼ばれる謎の石造物を頂きに乗せる丘陵直下にある。勢いよく湧き出す泉の水は、天理市豊田山付近で採石された砂岩（斉明紀二年〔656〕是歳条にいう「石上山の石」とみられる）の切石を組み上げた高さ1.3mの導水塔を吹き上がり、木樋から小判形をした花崗岩製の槽に落とされた後、その上澄みが亀形石の口を通して槽に流れ込む。古墳時代の水の祭儀に連なる観念がそこにある。当該の井泉は、その水の勢いからみて、かような祭祀景観が営まれる以前から湧き出していたと推察され、上述した「藤原宮の御井の歌」（『万葉集』巻第1—52）にみる、藤原京のシンボルであった藤井のように、飛鳥に宮の造営を開始した推古朝以来、飛鳥の聖井とみなされていたことが推察される。

第1章でふれた「沼名河の底なる玉」の永遠を歌った万葉歌（巻第13—3247）に前出する3245番、3246番歌は変若水を歌う。

天橋も　長くもがも　高山も　高くもがも　月読の　持てる変若水　い取り来て　君に奉りて
変若得てしかも（3245）

反歌

天なるや月日のごとくわが思へる君が日に異に老ゆらく惜しも（3246）

また養老改元の契機となった多度山の美泉は「或は白髪黒に反り、或は頽髪更に生ひ、或は闇き目明らかなるが如し」という効能があるという。ここにも変若水の観念がみえる。酒船石遺跡の亀形石槽を中心とした水の祭儀場の造営は、そこに使用される砂岩が天理市豊田山（石上山）産であることや、出土遺物の年代などから、斉明紀二年是歳条に「舟二百雙を以て、石上山の石を載みて、流の順に控引き、宮の東の山に石を累ねて垣と」し、「石の山丘」を作ったと記述される土木事業の一環としてなされた造作であることは間違いなかろう。書紀は当該記事にさきだち、「嶺（田身嶺）の上の両つの槻の樹の邊に、観を起つ。号けて両槻宮とす。亦は天宮と曰ふ」と記す。そこにみる「天宮」について、はやく黒板勝美氏は道教寺院とし、近年では福永光司氏らが不老長寿をもたらしてくれる神仙を迎えるための宮殿と論じた。

斉明は崩御の後、天智六年（667）二月に小市岡上陵に葬られる。「延喜諸陵式」は斉明陵を「越智崗上陵」と記す。「小市」、「越智」はいずれもヲチであり、それは「変若」に繋がる。孝徳崩御の後、重祚した斉明女帝は既に62才、変若への願いは切なるものがあったであろう。その陵地をヲチ岡と呼んだのもうなずける。「天宮」の造営とそれに続く「石上山の石」を用いた造作の思想的な背景が奈辺にあるかも推察がつく。

大きな海亀を鼇という。『列子』湯問篇には、渤海の東にある神仙の棲む山を背に乗せる巨鼇の話がみえる。また中国山東省沂南画像石墓の中室八角柱に、神仙（西王母）の座す山岳（崑崙山）を亀が支える図像が刻まれる。『丹後国風土記』逸文によれば、水江の浦島子は五色の亀となって顕現した仙界の女、亀比売にいざなわれて仙界に遊ぶことになる。そこは「海中の博く大きなる島」にある

ユートピアで、風土記はそこを「仙都」・「蓬山」・「等許余（常世）」などと表記する。神仙界で3年を過ごした浦島子が、玉匣を携えて本つ国に還ってみれば、そこには300余年の時が経過していたという。有限の時をもって比べてはいるが、それはたとえであって、浦島子はとこしえの世界、時間の観念のない空間を訪れたのである。亀は常世、すなわち神仙界への導き者であり、そこを象徴する存在であった。

尽きることない湧水を背に満たす亀形石槽こそ、仙界にあこがれ、変若を願った斉明帝の強い意志の表象にほかならない。

5．中国文化の摂取と倭化

「魏志倭人伝」にみえる伊都国の中心、三雲遺跡（福岡）から出土した、「竟」字を刻む3世紀中頃の甕棺も無視できない資料である。「竟」字は「鏡」字の金偏を省略したもので、銅鏡の銘文などに散見される。同じ三雲遺跡では、弥生中期後半の王墓である南小路1号甕棺に35面の前漢鏡が、また2号甕棺にも22面の前漢鏡が副葬され、さらに三雲遺跡の北にある弥生終末期の平原1号墳丘墓からは、大型内行花文鏡5面を含む40面もの銅鏡が出土した。伊都地方における銅鏡を副葬する慣習が、銅鏡を入手できない階層の葬送にあたり「竟」字を刻む甕棺を用いることで、銅鏡の副葬と同じ意味をもたせようとしたことがうかがい知れる。「竟」字は甕の口縁部に刻まれ、ふたつの甕をもって蓋と身とする甕棺の合わせ口の透き間からの邪霊の侵入を防ぐ意味があったものと考えられる。これも倭人流の中国文化摂取法と理解される。

三雲南小路の墳丘墓が築かれたころ、和泉地方の拠点集落、池上曽根遺跡では、第1章で触れた、ヒスイ製勾玉（沼名河の玉）を棟持柱の立ち上げに際して柱穴に埋納した大型掘立柱建物が営まれていた。その建物は正面中央に近接して、楠の巨木を刳り貫いた内径1.9mの枠を据えた井戸が掘られており、それには覆屋が架けられていた。その並外れた規模と大型建物との関連性から、そこに湧く水が首長祭儀に重要な意味をもつことが想定でき、前章で触れた古墳時代の王権祭儀と水の関係を遡らせる発掘資料と理解される。「沼名河の玉」が仙薬と同じ効能をもつ呪物と観念されていたことは、唐古・鍵遺跡出土の褐鉄鉱の殻に内包されていたふたつの勾玉に明らかであった。そこには神仙思想を改編しようとする倭人の営為が認められる。ならば、城之越遺跡の水の祭儀場の景観と祭儀の次第に関する復元的考察に認められた不死や若返りへの憧憬も、池上曽根遺跡の大型建物と、その正面に掘られた井戸に溢れる水にまで遡って認めるべきであろう。

『万葉集』や『懐風藻』などの奈良朝文学のみならず、宮廷庭園や正倉院御物をはじめとする造形の基層にのぞく神仙思想には、弥生時代以来の絶えざる大陸文化の流入と、列島既存文化との融合・改編の営みのなかで醸成されたという背景が存在することを確認しておきたい。

〔各遺跡の調査報告書は紙幅の関係から割愛しました。〕